

論文の内容の要旨

論文題目 屋外空間における中国都市居住高齢者の居場所に関する研究
—長春市の既成市街地及び新たな計画地における高齢者の滞留行動を事例として—
氏名 張 玲

高齢化社会に直面する中国の都市部において高齢者のニーズに対応する屋外空間として余暇時間に好まれるふさわしい滞留出来る場所がまだ十分に考慮されていない。高齢者がよく利用する住宅地の周辺、近隣、地域といった屋外空間は、高齢者と社会との接点に重要な意味を持つ場所となる。従って、高齢者の屋外滞留行動に適切な屋外環境はさらに進むであろう高齢化社会に対応する重要な課題の1つであるといえる。

本研究では、中国の都市に居住する高齢者の日常生活における屋外空間での滞留行動に注目する。まず、研究対象として長春市の既成市街地及び新たな計画地に住む高齢者を対象として余暇時間における屋外滞留行動が行われる典型的な場所(都市空間と集団空間)を取り上げている。なお、アンケート調査を通して高齢者の利用頻度が高い場所を選定し、定点観察調査のポイントを選定した。そして、行動場面から、高齢者の長時間にわたる滞留行動を抽出し、その上で高齢者と他者とのコミュニケーションを誘発できる都市空間と集団空間のそれぞれに関連する要素と特徴を分析し、今後の高齢者の余暇生活の質を確保するため、屋外空間の計画のあり方の知見を得ることを目的とする。

本論文は、序章、結論、およびその他の五章から構成されている。高齢者の滞留行動と屋外空間との関わりの関係を時間的、空間的、人的要素から述べ、「社区」(community)に住む高齢者の屋外空間の利用特性とその利用せれる居場所の形成の要素を考察した。

第1章の序章では、研究の背景および理論的背景についてまとめ、研究の目的、研究の位置づけ、論文構成、分析方法について述べる。政府は高齢者に対して「居家养老服务」という政策を講じており、高齢者に住み慣れた地域に継続して暮らすことが老後の生活によって重要であると示している。高齢者と他者のコミュニケーションおよび社会的コンタクトを促進するため、住宅地の屋外空間において日常生活の居場所としてどんな場所が好まれているか空間特質及び成立させている要素を論じる。

第2章では、調査地および調査地の選択理由を述べる。

まず、調査対象地長春市の代表である三つの「社区」を選定した。「社区」は「居家养老服务」政策を実施しているユニットであり、中国の街道或は居民委員会の最小の行政区分のことである。調査地のうち、二つの既成市街地(牡丹社区と徳昌社区)は都市中心部に位置し、もう1つの新たな計画地(明珠社区)は中心から外れた地域に位置している。次に、調査地へ予備観察調査と各住宅地に居住する高齢者へのアンケート調査を行い、得られたデータを照らし合わせ、各社区で居住高齢者がよく利用される周辺、近隣の「スポット」を抽出し、定点観察調査の場所を決めた。

第3章から第5章まで、具体的な定点観察調査およびその結果についての分析・考察を述べる。

第3章では、既成市街地の牡丹社区に隣接する計画して設計された「近隣公園」の利用実態を分析した。

牡丹社区の住宅地の各住棟の周りに塀があり、住棟間のオーpensペースで高齢者の滞留行動は観察されない。またアンケート調査の結果、牡丹社区の高齢者は都市空間を利用していることから、「近隣公園」を研究対象として、時間と空間的要素との関係を見るために、高齢者の屋外空間の滞留行動を観察した。近隣公園はよく利用されている都市公園であり、周辺住民だけではなく、周りの会社の職員にも昼休み時間に利用されている。また都市中心部へ行く市民も利用でき、高齢者は社会的コンタクトが促進できると考えられる。近隣公園では、特定の場所、特定の時間帯に多様な滞留行動が観察され、習慣的な行動が行われ、例えば、集団行動の構成メンバーは20年以上の付き合いの隣人であり、退職した高齢者がグループになって、特定の時間帯と場所で、(朝)河畔に沿って散歩し、(午後)亭に座って幅広い話題を話しながら特定の交流をしていた。また、空間を利用する際、設計意図と異なる使われ方が存在する。例えば、運動器具に座ったまま他者と交流する場面がよく観察された。なお、冬期に、鉄製の屋外ジムは冷たいに対し、健常者であるが、自分の車椅子を押してきてそれに座り、公園でトランプをする高齢者の姿があった。それは、装置的要素を補足する空間への自発的関与である。

第4章では、既成市街地の徳昌社区においては計画されていない建物間のオーpensペースを対象として分析した。

乏しい空間施設における徳昌社区の屋外空間は、滞留行動のよく行われる場所として住棟の入口や、壁、縁に沿って集まる滞留行動が多く観察される。また、屋外空間で滞留する高齢者の「空間への自発的関与(古い家具・折りたたみ椅子)」および「装置的要素の活用(縁、石等の利用)」が本社区の特徴として観察された。屋外空間と滞留行動の関係(自発的行為)、また社会的コンタクトの2側面から分析すると、屋外空間に計画されていなくても、高齢者は他者との交流意識や期待を持っており、屋外空間は高齢者が社会との接点を

持つ場所だと分かる。一方、空間的要素の活用或は「働きかけ」行為は高齢者自身の希望するセッティングを屋外空間に実現できると考えられる。様々な自発的行為から、既成市街地の屋外オープンスペースを利用している高齢者は高い帰属感を持っておりと言える。季節によっては、冬期の屋外滞留行動は「会話」グループのみ見され、グループが利用している場所は日当たりが良いという利点があった。季節に関しては、冬期の屋外滞留行動を促進するため、微気候の影響も考えなければならない要素であると思われる。

第5章では、計画的に設計された明珠社區の集団空間の利用実態を観察分析した。

明珠社區は豊かな屋外空間を所有する新たな計画地である。その計画地の利用状況、また高齢者の屋外空間での滞留行動における居方、その場所の分布および時間帯の利用状況を分析した。各計画地の利用状況から、季節に関係なく、夏期も冬期も「よく利用される」場所と「あまり利用されていない」場所が存在していると分かった。そのうち、季節によって、夏期に賑やかな空間でも冬期にはほとんど利用者が観察されない空間もあった。それに対し、広場空間は季節に関係なくよく利用され、逆に、美しい景色が見られる親水空間でも、滞留行動があまり観察されなかった。季節の影響からみると、夏期は運動器具、ベンチ、テーブルのセットなどの計画的装置がある空間が賑やかな場所であるのに対して冬期の利用者は少ない。段差、樹木を含んでいる空間は夏期に快適な場所であるが、冬期は寒さもあり、雪が積もって地面が滑り易く高齢者は安心できない。逆に、冬期は利用頻度が高い場所は、ベンチのみを配置しており、段差がなく平坦な広場である。従って、冬期に場所へのアクセスのし易さが屋外行動を行う1つの重要な要因と考えられる。

第6章では、第3章から第5章の考察に基づき計画された空間および計画されていない空間の総括的な考察を行った。高齢者の日常生活に適する居場所としての屋外空間の特質は、時間的要素(行動の規則性、滞留行動の習慣性、季節別の場の選択性)、空間的要素(空間的階層性、場の許容性、装置的要素の活用および空間への自発的関与)、人的要素(構成メンバー、個人行動、集団行動、社会的コンタクトの考察)およびその他(微気候の影響、管理および運営)の要素をまとめて論じる。

第3章から第5章までの調査から、各空間の特徴をまとめ、アクセシビリティが高い場所、季節に応じて利用される場所、および季節に関係なくあまり利用されない場所も観察された。また、計画された空間も計画されていない空間も囲み空間と通り空間に分類され、囲み空間は集中的行動が発生しやすく、通り空間は分散的行動で利用されやすいと分かった。また、「装置的要素」を中心として、滞留行動が行なわれ、特に夏期に利用率が高く、冬期に利用率が低い。また、季節によって、夏期より冬期の滞留行動の類型および数が少ないが、「移動的滞留行動」が多いと観察された。そのため、通り空間の内、繋がり散歩道(牡丹社區の河畔空間)を利用されやすい、この章では、高齢者の屋外空間の滞留行動に

影響を与えるのは、「空間の形状」、「装置的要素」、「微気候」であると言えることを示した。

既成市街地と新しい住宅地を比較すると、屋外空間に反映され使われ方および成立した行動場面が異なり、人的要素から、既成市街地の高齢者に長時間コミュニケーションがよく観察され、新しい計画地の高齢者に深いコミュニケーションが見られず、「人間関係」によって、高齢者間の社会的コンタクトの広さと深さも異なると分かった。また、性別によって別れ滞留行動が行われることも分かる。住宅地の屋外空間は高齢者と様々な滞留行動を通じた参加者の交流の場所として、自然発生的なコミュニケーションが、人間関係の増進の役割を果たしていることを示している。また自発的行為から高齢者は屋外空間で他者と交流することに対する欲求があると考えられ、深いコミュニケーションを誘導できる空間計画が良いと思われる。

なお、時間的要素から、一日の時間帯や季節によって行動の規則性と習慣性があり、観察では滞留行動のタイプの多様性が発見され、それに対応するため、多様な空間を計画することにより高齢者に適切な屋外空間を作れると思われる。また、高齢者の生活習慣を理解した上で空間を設計すれば、より快適な環境を作り得られると思われる。

第7章では、以上の考察をまとめ、今後の都市に居住する高齢者に適合する屋外空間のあり方について示唆する。各章のまとめを行い、本研究のケーススタディから得られた知見に基づき、中国の高齢者の屋外滞留行動に適する都市空間の計画について提言を試みる。

まず、古い住宅地を改善する際、高齢者の「人間関係」が無視できず、囲み空間を作れば、集中的行動(コミュニケーションを発生ししやすい)を促進できる。また、道は歩道と車道に分け、安全性が高い回遊できる散歩道を作れば、季節に関係なく、高齢者は会話をしながら散歩できる。また、古い住宅地は都市空間の近隣公園を利用できる場合、近隣公園へのアクセスのし易さも考慮すれば、高齢者がより豊かな滞留行動が展開でき、他者と社会的コンタクトを取る大切なきっかけにできると考えられる。

次に、新しい住宅地を計画する際、屋外空間を有効に利用するため、どのような屋外行動を誘導できるか、どのような「空間の形状」、「計画的装置」および「微気候」などの要件にするか、よく考えて設計することが必要である。また、空間を計画する際には、緻密に設計された規定性が高い空間より、高齢者の希望に応える許容性が高い空間、いわゆる各自の望むセッティングに調整できる空間が計画に盛り込まれるべきだと考えられる。

最後に、滞留行動を観察を通じ、屋外空間を計画すれば、物的要素だけではなく、高齢者の心理的要素(存在感・帰属感)の影響も考えなければならないと言える。滞留行動に適した屋外空間を計画する場合には、ただの施設などを更新するだけではなく、住んでいる高齢者の生活習慣・居方・地域における微気候の影響などの要素を十分に考え、空間の構成をよく区分して設計し、屋外空間が高齢者に自分の住まい領域として実感されれば、大きな安心感と高い帰属感を持たれることが可能になる。